

上高井郡  
小布施町

# 最明寺址推定地確認調査報告書

## 目 次

- 1 調査の経過
- 2 環 境
- 3 発掘の状況
- 4 遺 物
- 5 ま と め
- (付) 最明寺について

1987年3月

小布施町教育委員会

## I 調査の経過

長野県上高井郡小布施町大字雁田字馬場先には、享保年間（1716—1735）に臨済宗の大雄山最明寺が所在していた。伝承によれば、それ以前は雁田山麓の字最明寺に所在していたとされ北条時頼の廻國時代に創建されたといわれている。小布施町教育委員会はこの伝承を解明するため、昭和61年度の事業として試掘確認調査を計画した。調査を実施するにあたり、上高井郡の教職員で構成する上高井地歴同好会の、特に地元会員を中心に次のとおり調査団が結成された。

### （調査団）

顧問	金井汲次	調査員	黒沢晴美	調査補助員	上野平曜輝
調査員	青木廣安	"	小林秀世	"	小林浩樹
"	荒井 宏	"	郷道哲章	"	塩崎恭平
"	池田 哲	"	関 孝一	"	清水春樹
"	市川治利	"	寺島繁雄	"	田村道男
"	金井正三	"	轟三己夫	"	平岡千枝

調査は11月になって始められたが、その経過は次のとおりである。

### （経過）

- 11月8日（土） 調査地の雑木を伐切り、グリットの設定を行った。
- 11月15日（土） 地鎮祭の後、調査団の結成と調査の打合せを行った。
- 11月16日（日） 試掘調査を開始。遺物包含層は予想以上に浅く、五輪塔、瓦、磁器が擾乱状態で出土した。
- 11月23日（日） A—8 グリットで部分的に黒色土の間層が見つかり、土層の状況把握に重点をおく。遺物及び遺構は検出されなかった。
- 11月30日（日） 間層をなすと思われた黒色土は自然堆積の火山灰土で、人為的な遺構は検出されなかった。測量及び写真撮影の後、埋め戻しを行った。
- 12月19日（金） 地元の雁田公会堂で調査報告会が開かれ、地元区民の積極的な意見交換が行われた。
- 3月22日（日） 栗ヶ丘小学校で調査報告書の作成について、最終の打合せを行った。

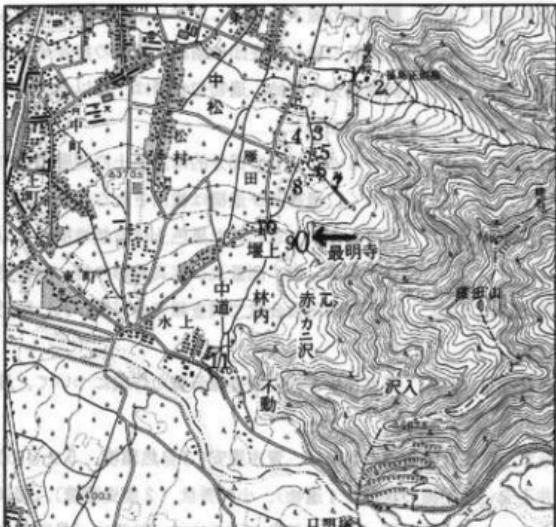
なお、本調査報告書の執筆は、青木廣安（2自然環境、5まとめ）、市川治利（2歴史環境）、金井正三（3発掘の状況、4遺物）、小林秀世（2歴史環境）、関孝一（1調査の経過）の諸氏である。また、湯本軍一・郷道哲章の両氏には、特別に「最明寺について」と題し寄稿いただいた。

**自然環境** 小布施町の東方に位置する雁田山は、いくつかの尾根を西方に突出させ、南北に連なってきれいに並んでいる。この山麓は松川扇状地の右扇側にもあたり、沢入などからの湧水を利用した水田地帯がみられる。今回試掘した地点は、南から数えて三つ目の、愛宕山の尾根下にあたり、山麓にそって最近開かれた「せせらぎ緑道」の山側にあたる。調査地は山麓にそって比高約2m、巾約5m、長さ約10mのベンチ状地形をなしている。ここから愛宕山の尾根筋を登っていくと、節理の発達した雁田第2熔岩の露出があり、カモシカの糞などがみられる。さらにこれを登りつめると、賽ノ川原とよばれる尾根の頂上にでるが、やや平坦面が広い。ここでは第2熔岩の岩脈が土壌状に露出している。

愛宕山の尾根の下部突端は「せせらぎ緑道」の開削で切断され、ここでは基底をなす第1熔岩層が露出している。熔岩の一部はタマネギ状の剝離をするが、この熔岩層が調査地の北端につながり地山層を形成している。調査地のベンチ状の部分は、凹状地形となるため地山が深くもぐり、山腹から落下した雁田第2熔岩の角礫と、火山灰や腐植土が混在して堆積している。表土をはぐと、ベンチ状平坦面の南側は黒褐色の腐植土が厚く、北側の尾根に近いほど浅い。腐植土の下部は黒色の火山灰土が層をなし、グリットの中央部が特に厚く堆積している。

**歴史環境** 雁田山麓は小布施町の歴史の発祥地といっても過言ではない。原始時代には赤瓦端遺跡が営まれ、古代には雁田山麓古墳群として知られる積石塚の群集墳が所在している。中世には一帯を雁田郷と呼び、淨光寺の薬師堂を今に伝えている。

また、雁田山麓の各沢には淨光寺や岩松院をはじめ、觀音とか最明寺など寺跡の存在がうかがわれる所が多い。鎌倉時代に存在していたという大雄山最明寺について、「雁田誌」では次のように記している。



第1図 遺跡付近の地図（1～11五輪塔出土地）25,000分の1

「應濟宗大雄山最明寺ハ古時愛宕山ノ半嶺小平地ニ在リ。今其地字名ヲ、狩田ノ開基タリ、伝説ニ弘長年間北条時頼号最明寺行脚ニ來リ住セシ所ナリト云、後之ヲ字馬場先ニ移ス。現今七百五拾」。「愛宕堂古時字最明寺山ノ嶺上賽川原ニ在リ、大雄山最明寺ノ祀ル所ナリキ、後故有リテ淨光寺ニ属ス、享保十八年同寺十五世明賛代半嶺ナル現在地ニ移セリト」

すなわち、山の嶺上に賽の川原と呼ぶ平坦な所があって、最明寺は愛宕堂とともにあった。後に最明寺は宇馬場先750番地に再興され、愛宕堂は中腹の現在地に移されたというのである。

ところで、「せせらぎ驛道」が開削された際、最明寺地籍で五輪塔がまとまって発見された。地元の人たちによれば、雁田山麓には五輪塔片がかなり多く発見されているといわれ、今回の調査で概略を調べてみた結果、11箇所32個が確認できた。その分布は第1図に示したとおりである。発見されている五輪塔は5基以外いずれも部分的なもので、地水火風空すべてがそろっているものは少ない。形は最明寺地籍で発見されたものと同じく、小形で拙劣である。いずれにしても、この五輪塔群が雁田山麓の歴史とどのようにむすびついているのか、今のところ不明である。あるいは最明寺とも関係があったかもしれない。それは単に五輪塔に限らず、他の石造物や遺構、あるいは遺物を総合的に調査することにより、かなり歴史の実態に迫ることができよう。

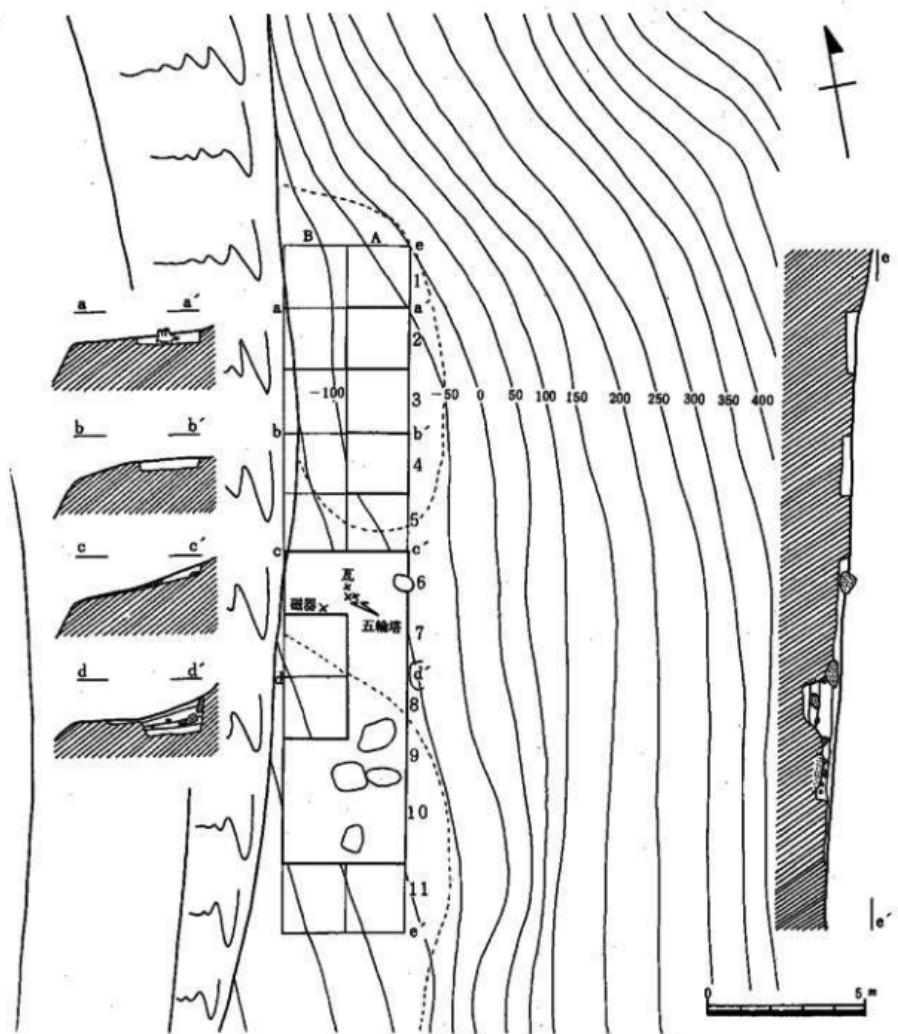
### 3 発掘の状況

調査はまずベンチ状の平坦部に、南北22m、東西4mの範囲で2m四方の区画を行い44グリットを設定した。発掘は1グリット毎に行い、状況によって拡張する方法をとった。各グリットの状態は次のとおりである。

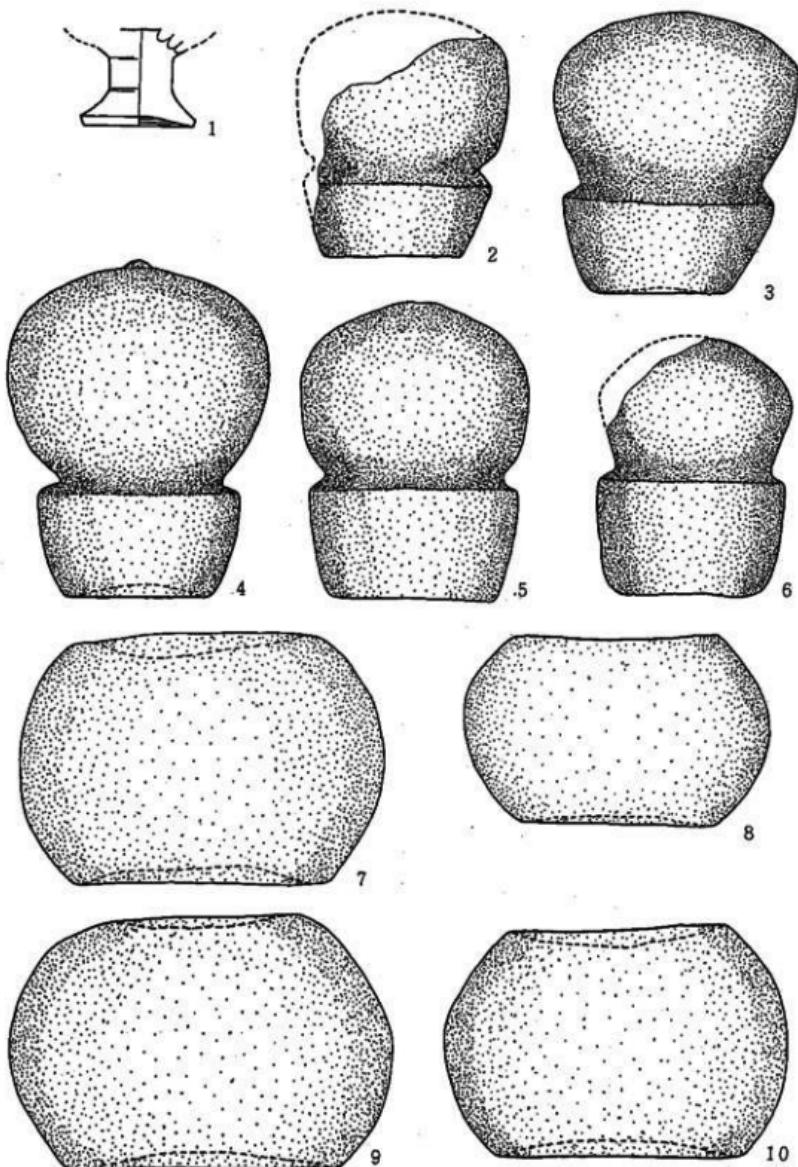
北側のA 2グリットは約30cmで地山面に達し、遺物や遺構は全く検出されなかった。A 4グリットでも山砂利層は固く、約30cmで地山面に達した。他のグリットで検出される転石もなかった。A 6・7グリットは強い傾斜面で、約20cmで地山面に達した。A 1~7グリットの層序は、腐植土の堆積がほとんどなく、山石と山砂利のきわめて固い層であった。

一方、A 8~11グリットは沢地形の部分にあたり、雁田第2熔岩の転石を含む腐植土の堆積がかなり厚くみられた。転石は平石が多く、寺院跡にみられる礎石と間違いやすい状態にあり、礎石かどうか確認するため、A 8グリットを約1mほど掘り下げた。その結果、大きな転石が不規則に星々と重なり、沢地形の窪地に転石が集中したことがわかった。A 8~11グリットの層序は、表土下に転石が混在する腐植土層があり、その下部は黒色の火山灰土が続き、部分的に山砂層が入りこんだ状態となっていた。

なお、Bグリットでは地表下約5cmほどのところから、五輪塔片2個、磁器片1個、瓦片1個がまとまって出土した。しかし、その出土状態は遺構に結びつく状態ではなく、攪乱状態であった。



第2図 調査区及び断面図実測図



第3図 遺物実測図 1 (1:2) 2~10 (1:4)

#### 4 遺 物

今回の調査で出土した遺物は、五輪塔片2個、磁器片1個、瓦片1個であった。このうち、瓦は軒瓦の一部で、現代のものと考えられる。五輪塔はこの他に、「せせらぎ緑道」の開削時に出土したもののが8個あり、合わせて報告することにしたい。

磁器（第3図1） 高杯または器台の脚部である。現存の高さは3.3cm、脚部4.0cmを測る。胎土はきめ細かく、ロクロ整形痕がよく残っている。釉は白で、全体にいきわたっている。染付等はない。近代の磁器と考えられる。信仰用具であることに間違いない。

五輪塔（第3図2～10） 本調査で出土した五輪塔は空風輪部分（2）と水輪部分の各一点である。3～10は道路開削時に出土したものである。いずれも安山岩製で、ほぼ同時代のものと考えられる。空風輪は宝珠形の空輪と半球形の風輪を別々に造る場合もあるが、構造的に空風輪と一緒に造る場合が多く、本出土品もその例にもれない。

空輪は宝珠形というよりは球形に近い。頂部の突起は4には明確にあるが、3には最初からなかったものと思われる。直径13～18cm、風輪よりもやや大きく造っている。5には頂部の突起が存在していた痕跡がある。風輪はわずかな丸みがあるものの、逆台形から6にいたってはほとんど円形である。高さは5～8cm、直径13～15cmある。水輪は球形であるが、造塔の安定性から上下が削平されている。本出土例の4個はいずれも安定性をよくするため、深さ1cm前後のくぼみがつけられている。高さは13～18cm、直径21～27cmある。

#### 5 まとめ

今回の調査地はきわめて限られた範囲であり、結果としては最明寺跡の存在を確認するまでに至らなかった。「せせらぎ緑道」で発見された五輪塔がどのような意味を持つものか不明であるが、雁田山麓には各所に五輪塔が分布し、最明寺地蔵に限られたものではない。もともと五輪塔は墓標や供養塔など、その性格は多様である。時代が下って室町時代になると、大形なものは少なくなり、整形が拙劣になる。戦国時代にかけて武士の墓として爆発的に流行したと考えられる。「小布施町史」によれば、「雁田郷の場合、矢野氏は北条氏と直臣の関係もあるし、和田氏も御家人としての立場から、あるいは北条氏との私的な関係もあり、時頬の死を悼んだかもしれない。こうした時頬の直臣や時頬の徳を慕う幕府の御家人が、その所領の雁田郷に一寺をつくり、最明寺と号して、その冥福を祈ろうとしたことは考えられることである。」としている。出土した五輪塔の時代が鎌倉時代までさかのぼらないとしても、この地域が武士と関係が深く、時頬の冥福を祈る武士がいたことも推測される。五輪塔はその武士たちの子孫のものとも考えられるのである。

(付) 最明寺について

最明寺は鎌倉時代に鎌倉山内にあった寺院である。建長6年(1254)頃、当時の執権北条時頼が構えた別邸であった。康元元年(1256)7月、将军家がこの時頼別邸を訪れた。この時の「吾妻鏡」の記事に「此の精舎を建立の後、始めての御礼仏也」とあり、これ以前に邸宅を兼ねた寺院となっていたことがわかる。

この年の11月22日、時頼は北条重時の子長時に執権職を譲り、翌23日には最明寺において蘭渕道隆を戒師として出家した。時頼は出家後も幕府のなかで重きをなしていたが、弘長3年(1263)11月22日、37才で死亡した。「吾妻鏡」によれば、時頼の死に際して出家する御家人が後を断たず、遂には諸国の守護を通して御家人の出家を禁止する御教書おきょうしきを出すほどであった。御家人達の時頼人気は、時頼が執権の時に京都大番役や舞屋役を改正したり、節約の励行をしたりする等、御家人や庶民の負担を軽減したためといわれている。そして鎌倉時代末期から時頼に関する説話が残されるようになった。

「徒然草」では、味噌を着に酒を飲むというような質素を旨とする時頼の性格を示す話等を載せている。そして、南北朝時代以降、「増鏡」「太平記」・語曲などに最明寺入道(「吾妻鏡」では出家後の時頼は相州禅室または最明寺禅室と記され、最明寺入道の呼称はない。)の廻国伝説が現れてくる。特に有名なのは語曲「鉢の木」にみえる次のような話である。

身分を隠し、旅の僧に身をやつした時頼は、信濃から鎌倉へ向かう途中、大雪のため上野国佐野(群馬県高崎市)あたりで行き暮れてしまう。そこで時頼は一軒の貧しげな家に宿をたのみ泊めもらう。その家の夫婦は僧が時頼であるとは知らなかったが、大事な鉢植えの木をも薪としてもてなす。僧に身分を問われたその家の主は、「自分は佐野源左衛門尉常世というがもともと佐野庄(下野国)の領主であったが、一族の者に所領を奪われてこのように落ちぶれてしまった。」と話した。そして更に、「このように落ちぶれても、『いざ鎌倉』の時には、ぼろの鎧を着、やせ馬にまたがり一番乗りをするつもりだ。」と語った。一夜明けて僧は立ち去ったが間もなく鎌倉から勤員命令が出され、常世も駆けつけた。いならぶ御家人の中で、時頼に呼び出された常世は宿を貸した僧が時頼であったことを知る。時頼は常世の忠勤を賞し、本領佐野庄とその他の所領を与えた。

このような時頼の廻国伝説は、寺院や仏像建立の伝説を中心に全国に及んでいる。この伝説が真実であるか否かについては論が分かれている。また、廻国の目的についても、時頼の頑密偵の組織があった為であるという説や、信濃に廻国伝説が多いのは蒙古襲来に備えて信濃の牧場視察に出かけたものであるとする説等がある。豊田武氏は上記のような説をふまえたうえで、廻国伝説及びそれに伴う寺院や仏像建立の伝承のある地域は、北条氏の直轄領(得宗領)または北条氏家臣(得宗家人)の所領があった所に多いと考えた。そして、特に時頼の時代は宝治合戦(宝治元年・1247)等により有力御家人を倒し、得宗領の拡大を図ったことが伝説の背景

にあるという。

信濃国にあっては比企事件以後、北条氏が守護であった。また、諏訪氏は北条氏の被官（家臣）であり、幕府滅亡の後北条高時の遺児・時行を擁して中先代の乱を起した。この二例からみても、信濃国は北条氏の影響の強い国であったと考えられ、時頬伝説の多い国の一であつたらしい。伝承地は表のとおりである。詳細は「長野県史」に譲るが、交通の要衝・重要地・北条氏関係所領に伝承地が多いと考えられる。

本報告に関わる大雄山最明寺はもと雁田寺最明寺にあり、時頬の廻國時代に創建されたという伝承がある。この地域は中世には東条莊雁田郷と呼ばれた。鎌倉時代末に雁田郷中条を領有していたのは矢野伊賀入道であった。矢野氏は幕府政所の役職をつとめる京下りの下級貴族出身の御家人の系譜をもち、後に北条得宗家の家臣となっている。その点では最明寺と北条氏との間に密接な関わりのある伝承地である。

以上、最明寺について駆け足で述べてきたが、鎌倉時代の伝説は時頬伝説にとどまらない。信濃国にあっては木曾義仲や泉親衛伝説に代表されるであろう。このような人々の伝説が、どのようにからみあっているかを考えることも、今後は必要となってくるであろう。

#### （参考文献）

○読売新聞社編「日本の歴史4・鎌倉武士」、○石井進「日本の歴史7・鎌倉幕府」、○長野県編「長野県町村誌」、○豊田武「北条時頬と廻國伝説」（「豊田武著作集7」）、○「国史大辞典」（「最明寺」の項）、○小布施町編「小布施町史」、○長野県編「長野県史」通史編第2巻（中世1）、○坂井衡平「善光寺史」

（表）信濃国関係時頬伝承一覧

伝承地等	所在地	概要
西明寺殿御廟所	中野市新保	「諏訪御符礼之古書」文正元年（1466）の項。
大雄山最明寺	上高井郡小布施町雁田	寺は現存せず。字名として残る。
聖林寺	上水内郡豊野町神代	寺は現存せず。窟堂にて時頬入禪、本尊を安置。
西明寺殿後廟所	長野市平林	「諏訪御符礼之古書」文明9年（1477）の項。
西明寺	長野市小松原	「三宝院文書」弘治2年（1556）のころ。
鎌倉院西明寺	長野市真島	時頬開基「長野県町村誌」による。
寂光山最明寺	佐久市根岸	時頬の木像を安置。
神原山最明院	南佐久郡白田町田口	時頬、薬師如来を安置。
大井山	佐久郡岩村田	「鉢の木」
伴の里	佐久市伴野	「鉢の木」
古塔（君石）	松本市寿	時頬の子息の墓「長野県町村誌」による。
諏訪国	諏訪地方	時頬の滞在。「長野県町村誌」による。



遺跡の遠景



遺跡の全景

イセギで見一鳥

馬場先地  
籍の全景



平石の転石



転石の状態



A-8グリット  
の層序

部分的

完全の層



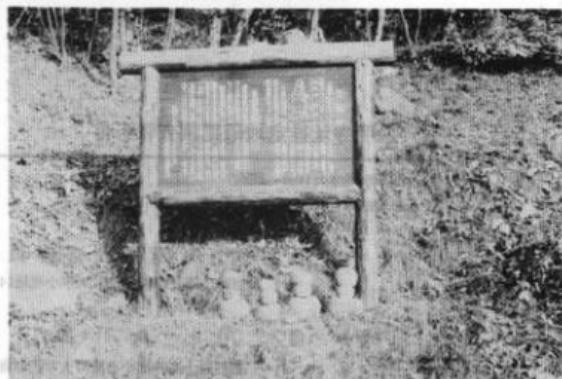


五輪塔と瓦  
の出土状態



磁器片の出  
土状態

道路開削時  
出土の五輪  
塔と標識



## 最明寺址推定地確認調査報告書

昭和62年8月10日 印刷

昭和62年8月20日 発行

発 行 小布施町教育委員会  
長野県上高井郡小布施町大字小布施1491-2

印 刷 広 角 印 刷  
長野県上高井郡小布施町大字小布施2452